

## テキスト研究における分節

重 見 晋 也

### はじめに

記号とは、意味作用の体系とコミュニケーション過程とによって実現される一つのテキストである<sup>1)</sup>とエーコはサン・パウロ大学の学生への講義のためのノートを始めている。むろんエーコのことばは「記号」の定義付けを行ったものであるが、「記号」が「テキスト」と結びつけられている点において興味深い。あるいは「創作者によって主体の表現として生み出されたもの、それは一個の表現体である。[...]それは一個の『テキスト』である。『テキスト』は読者がそこからまとまった意味を引き出すべき表現体でもある<sup>2)</sup>」と説明される時、「テキスト」ということばは、解釈行為の対象となるものであればどのようなものであっても、それが「テキスト」と呼ばれる資格を持つという考え方が表明されている。そこで *le Petit Robert* を引いて見ると、その最初に「エクリや作品を構成する語句や文章」という定義が与えられ、その最後に「決定された秩序を予見させる全ての書かれたドキュメント」<sup>3)</sup> という定義が与えられている。このことから分かるように、現代において「テキスト」ということばは、文学作品などのようにある程度の長さや分量を要求する一方で、エーコなどの形容に見られるように実体の分量としては非常に短い「記号」のようなものにまで結びつけて考えられるのである。

このように「テキスト」ということばの外延が現代において広がってきている。こうした現象の裏には、テキスト学あるいはテキスト論といった研究領域の台頭を確認することができるのはいうまでもない。記号論やナラトロジーなどのテキスト論といわれる研究分野は、言語学や哲学といった従来からの人文科学研究の成果を取り入れながら、より厳密でより科学的な手法の構築を目指してきた。

これらの新しい研究は、従来の作品研究に対するアプローチの仕方を刷新す

ると共に、その研究手法を文学作品に限定することなく、新聞記事やポスターといった日常的な「テキスト」からさらには絵画や彫刻作品といった非文字的な「テキスト」へと、その研究対象を拡げている。そして現代においては新たな「テキスト」としてコンピュータによって作られる電子テキストやハイパーテキストなどが生まれてきており、テキスト論もまたそれらの新たな研究対象に対応する必要性に迫られているという状況がある。

そこで本論は、「テキスト」の概念が拡がりつつあることを前提に、コミュニケーション・モデルの紹介とその考察から暫定的なテキスト・コミュニケーション・モデルを仮定し、その後にロラン・バルト、ジュラル・ジュネット、ミエ・バルの三人のナラトロジー研究者が研究対象としての「テキスト」を分節化する方法について、その特徴を比較することで電子テキストやハイパーテキストなどに対応するテキスト論の構築に資するための基礎的考察を行うものである。

## 1. コミュニケーション・モデル

「テキスト」を静的な研究対象としてとらえるのではなく、コミュニケーション過程において生成する表現体であるという考え方は、本論の冒頭で紹介した記号論の論者たちだけにとどまらず言語学の談話分析や機能文法などの分野でも広く受け入れられている考え方である。「テキスト」がコミュニケーションと深く関わっているとしても、コミュニケーションをどのようなものとしてとらえているのかを確認しておかなければ、現象としての「テキスト」を理解できないだろう。そこで本章では、言語学に依拠したコミュニケーション・モデルとコンピュータ科学に依拠したコミュニケーション・モデルについてその基本的な考え方を把握した後、コミュニケーションとしての「テキスト」を理解する上で必要なモデルを暫定的に提案したい。

### 1-a) 言語学的モデル

「コミュニケーション」については多様な分野から研究が行われているが、その際しばしば引用されるのが、ソシュールの『一般言語学講義』に出てくる次のような図式である。

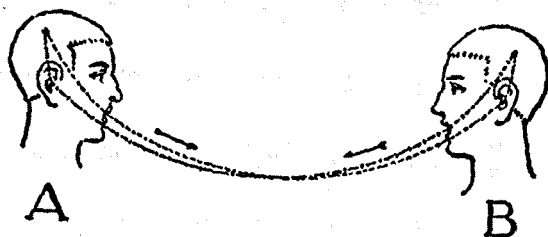


Fig 1.<sup>4)</sup>

『一般言語学講義』でなされているこの図への説明によれば、Aの脳からの刺激が音としてAの口から発信され、その音がBの耳を通して受信されてBの脳において概念と心的に結びつくことで（一方向の）コミュニケーションが成立すると考えられている。ソシュールのこのモデルは、ウンベルト・エーコも『記号論』のなかで言及しているように「記号学の最初期に繰り返し用いられた図式」<sup>5)</sup>であり続けた。その後この初期の言語学的コミュニケーション・モデルを出発点として、エーコの記号学的なモデルやグレマスの意味論的なモデルなどさまざまなコミュニケーション・モデルが表明されたのだが、基本的にはこの言語学的モデルが採用され、それを補完するような要素がさまざまに付け加えられていると考えることができる。この言語学的コミュニケーション・モデルが表した重要な点は、コミュニケーションの成立においてはAとBという二項が必要であること。そして、そのAとBとを結んで記号体系がやりとりされるための何らかの媒体が必要であるということを明らかにした点であろう。

これと同じような図式を実はコンピュータ科学の分野でも見ることができる。

### 1-b) コンピュータ科学的モデル

コンピュータ通信の可能性を数学的に立証したことで知られる、クロード・E・シャノンは *The Mathematical Theory of Communication* の中で次のような図式を提示し、システムとしてのコミュニケーションを概観している。

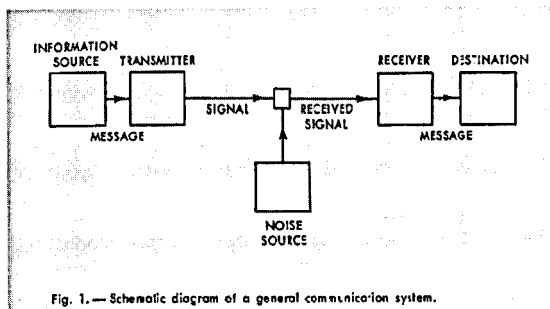


Fig. 1.— Schematic diagram of a general communication system.

Fig. 2<sup>6)</sup>

The information source selects a desired message [...]/ The transmitter changes this message into the signal which is actually sent over the communication channel from the transmitter to the receiver. [...] The receiver is a sort of inverse transmitter, changing the transmitted signal back into a message, and handing this message on to the destination. When I talk to you, my brain is the information source, yours the destination; my vocal system is the transmitter, and your ear and the associated eighth nerve is the receiver.<sup>7)</sup>

このコンピュータ科学的モデルにおいては言語学的モデルの両辺に一つずつコミュニケーションを成立させるための要素が付加されていることが分かる。この点ではコンピュータ科学的モデルは言語学的モデルと大きく異なっているように見えるが、コンピュータ科学的モデルにおいても「発信者」と「受信者」を想定しつつそれぞれがメッセージを送受信するための機器を媒介してコミュニケーションを成立させているのであり、本質的には言語学的モデルとそれほど大きく変わるところはないといえることができるだろう。コンピュータ科学的コミュニケーション・モデルにおいて重要なのは、上図の中央下に "NOISE SOURCES" ということばが見えているように、コミュニケーションの通信路に入り込む「ノイズ」の問題であって、メッセージが通信路を伝達される際に割り込む可能性のあるノイズをいかにして減少させ発信器から受信器にメッセージを正しく伝えるかという点を数学的に解明することだったのである。<sup>8)</sup>

### 1-c) 暫定テキスト論的モデル

ソシュールらの言語学的モデルにせよ、シャノンのコンピュータ科学的モデルにせよ、「発信者」と「受信者」がいてその間を「メッセージ」が伝わるという図式になっているという点では同じであるといえる。しかし、言語学的モデルではコミュニケーションに関わるエージェントが「発信者」と「受信者」の二つだったのに対して、コンピュータ科学的モデルでは、「発信者」側では「情報源」と「発信器官」とに分けられ「受信者」側でも同様に「受信者」と「受信器官」に分けられているという点では異なっている。とはいえ本質的にはコンピュータ科学的モデルの引用で見たように、その説明はソシュールの説明を参考にしたかと思うようなもので、両者の立場における「発話行為」の図式的な理解はほぼ同じ発想から出発していると考えることができる。

しかし文学研究、特にフランス文学研究では、19世紀にギュスタヴ・ランソンらにより研究が制度化されてからは1)文学を社会の表現にとらえると同時に、2)テキストの生産者を作者と見なしてその作者の地位を向上させるという二つの点が重視され、その上で文学研究が展開されてきた。<sup>9)</sup>ところがこのような研究態度は20世紀になり変化し始める。その変化を最も象徴的にあらわしている論考の一つがロラン・バルトによる「作者の死」であるといえよう。バルトはこの論評により、「作者」という概念と結びつけて考察される「社会、歴史、心理、自由」から文学研究を解放し、「読者の誕生は『作者』の死によってあがなわれなければならない」<sup>10)</sup>と宣言したのだった。このように、バルトが強力に推し進めた新しい文芸批評・文学研究の方法は、実在としての「作者」すなわち「メッセージの発信者」を研究対象から外すという点において特徴的であるといえる。つまり、文学研究における「作者の死」の宣告は、裏を返せば「テキスト」には通常「作者」が想定されるということをあらわしていると考えることができるのである。こうした観点からすると、先ほどのコンピュータ科学的、言語学的な二つのコミュニケーション・モデルには実は大きな相違点があることがわかる。

言語学的モデルでは、コミュニケーションに関わるエージェントは二つだけで、メッセージの発信に関わるエージェントは「発信者」だけになっていた。

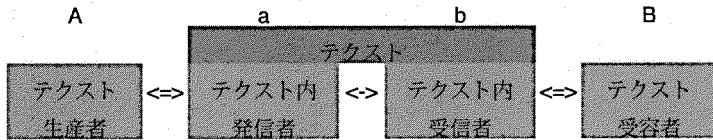
こうしたモデルに対してテキスト論的観点、つまり文学研究において想定されているコミュニケーションの観点から、「作者」を考察の対象から外さねばならないという要請を言語学的モデルに対して認めるとすれば、このモデル上ではテキスト研究の考察対象がコミュニケーションではなくなってしまうという矛盾した事態に陥ることになる。一方でコンピュータ科学的モデルの場合には、「作者」としての「発信者」を考察の対象外におくことを認めたとしても、メッセージの伝達という現象をモデルとして十分に表現することができる。それゆえに、言語学的モデルよりもコンピュータ科学的モデルの方が、テキスト・コミュニケーションを考える上では適したモデルであると考えることができるのである。

この点からコンピュータ科学的モデルの方がテキスト・コミュニケーションの現実をより明確に表していると仮定することができる。次にコンピュータ科学的モデルでは「発信器官」と「受信器官」を結ぶ「通信路」を「メッセージ」が伝達すると説明されるが、「テキスト」が問題になっている場合に「テキスト」というメッセージを支持している素材がこのモデルのどこまでをカバーしているのか確認しておく必要があるだろう。

確かに語りのテキストという限定された対象に対してではあるが、テキスト研究の中でもナラトロジーはテキストの構成要素について細かな分類を行うことによって研究成果を挙げてきた。テキストの外にある作者は括弧にくくっておいた上で、ナラトロジーでは「テキスト」内の「語り手」が「テキスト」に果たす機能を最低でも三つに分類してる。「行為者としての語り手」、「私」としての語り手」そして「証人としての語り手」の三つである。<sup>11)</sup>これらの分類についての詳細な検討は本論の目的とはそれるのでここであらためて取り上げることはしないが、この分類において重要なことは、ナラトロジーが「テキスト」を考察する際に「テキスト」の発信者としての「語り手」を想定し研究対象にしているという点である。こうしたテキスト生産者としての「作者」を研究対象から外すと同時に、さらにナラトロジーでは、テキストの外にいるテキスト受容者である読者としての「受信者」も括弧に入れた上で、テキスト内におけるメッセージの「受信者」を想定しているのである。<sup>12)</sup>このようにテキスト論の視点からコンピュータ科学的コミュニケーション・モデルを見直すと、コンピュータ科学的モデルにおける「発信器官」、「通信路」、「受信器官」の三項は

テキスト内部にあると考えられることが分かる。

以上の点から暫定的につぎのようにテキスト・コミュニケーションのモデルを図式化することができる。



このモデルでは、コミュニケーションはAとBの間に「テキスト」という媒体を介して実現されるが、実は媒体となる「テキスト」内部にもaとbというテキストに内在するメッセージの発信者と受信者を想定しているため、現代的なテキスト論の前提をふまえた上で現実的な「テキスト」のあり方を考察することができるのである。

## 2. 語りのテキストにおけるテキストの分節について

テキストが依拠しているコミュニケーション・モデルについて考察してきたが、前述したようなコミュニケーション・モデルを仮定したとしても、実際のテキストを分析する際には、テキスト内部の分析対象をその依拠したモデルに基づいて明確に規定しておかなければ有効な分析を行うことはできないだろう。

これについてもナラトロジーを中心にテキストを構成するレベル、考察対象となるレベルの分節化が研究され成果を上げている。それ故このテキストの分節という点について、ロラン・バルト、ジェラルド・ジュネット、ミエケ・バルという三人のナラトロジストの考えを確認しておくことは問題を整理するのに有効だと考えられる。

### 2-a) ロラン・バルト：« fonctions », « actions », « narration »

ロラン・バルトは、物語のレベルを想定することで問題を位置づけグループ化できると考えている。そして、語りのテキストを記述する際に« fonctions », « actions », « narration »という三つのレベルを区別している。

On propose de distinguer dans l'œuvre narrative trois niveaux de description : le niveau des « fonctions » (au sens que ce mot a chez Propp et chez Bremond), le niveau des « actions » (au sens que ce mot a chez Greimas lorsqu'il parle des personnages comme d'actants), et le niveau de la « narration ». On voudra bien se rappeler que ces trois niveaux sont liés entre eux selon un mode d'intégration progressive : une fonction n'a de sens que pour autant qu'elle prend place dans l'action générale d'un actant; et cette action elle-même reçoit son sens dernier du fait qu'elle est narrée, confiée à un discours qui a son propre code.<sup>13)</sup>

バルトによればこの「fonctions」というレベルは、プロップとブレモンが用いたのと同じように、意味を基準としたまとまりであり、語りのテキストを構成する全ての要素は意味を持った上で「fonctions」に分類することができるものとされる。「fonctions」のまとまり（単位）は文という言語学的な単位を越えることもあれば、文よりも小さい単位にとどまることもあるとされる。さらに意味のまとまりとしての「fonctions」の下には、二つのクラスと二つのサブクラスに分類できるとされるが、いずれにせよ「fonctions」に関連するこれらの分類を説明する時のバルトは、出来事や人物や場所や時間といった個別の要素を考えているわけではないようである。ここで問題になっている「fonctions」というレベルは意味を単位とするいくつかのクラスあるいはサブクラスから構成されているということが前提になっているのであるから、テキスト内の意味のまとまりの最小単位と考えることができることになる。

「actions」ということばについての説明に入る前にバルトは、アリストテレスの時代から古典主義の時代に至るまで、「登場人物」という要素は常に二次的なものであり「行為」という要素に付随するものと考えられていたと指摘する。その考え方を継承する形で、構造主義も「登場人物」という概念を排し、「行為主」という概念を導入することにより、心理描写を含まないような「行為主」を分析の俎上に載せる努力をしてきた、と述べている。

その上で、「登場人物」を「actions 行為」によって考察することが必要であり、それが物語を記述する第二のレベルであると主張している。



最後に「*narration*」についてであるが、バルトは次のように述べている。

Le niveau narratif est donc occupé par les signes de la narrativité, l'ensemble des opérateurs qui réintègrent fonctions et actions dans la communication narrative, articulée sur son donateur et son destinataire.<sup>14)</sup>

このように述べて、バルトは物語行為としての「*narration*」とは「*fonctions*」と「*actions*」とを含みつつ読者の眼前に提示されるものであると考えている。少し図式化してしまうと「*fonctions*」と「*actions*」は同じレベル同じ階層にあって、「*narration*」はそれら二つのレベルよりも上位に位置づけられていると考えることができる。この点は「*fonctions*」と「*actions*」が複数形で用いられているのに対して、「*narration*」はそれらを統合して提示するレベルとして単数形で用いられているということからも、レベルが同一でないということが明らかなのである。

バルトは以上のような「テキスト」を三つに分節化するという考えを提示することにより、テキスト研究を遂行する上での大きな枠組みを決め、その中でより下位の、より細かな問題について論じているのである。

## 2-b) ジュネット : 「*histoire*」, 「*récit*」, 「*narration*」

バルトが「テキスト」を三つに分節化したのと同様に、ジュネットも同様な三分法を、ただしバルトとは少し異なる方法で提示している。ジュネットは「*récit*」という言葉が持つ三つの意味を披露しながら、そこを出発点としてテキストを分節化する。

[...] *récit* désigne l'énoncé narratif, le discours oral ou écrit qui assume la relation d'un événement ou d'une série d'événements. [...] *récit* désigne la succession d'événements, réels ou fictifs, qui font l'objet de ce discours, et leurs diverses relations d'enchaînement, d'opposition, de répétition, etc. [...] *récit* désigne encore un événement [...], mais celui qui consiste en ce que quelqu'un raconte quelque chose : l'acte de narrer pris en lui-même.<sup>15)</sup>

最初は、ひとつあるいは一連の出来事の報告としての「*récit*」「最も一般的な用法」であり、二番目は言説の対象となる現実の出来事または虚構の出来事の継起とそれらの出来事を結びつける連鎖・対立・反復などの多様な関係とを指す「専門用語としての用法」であり、最後は誰かが何かを語ることによって成立する出来事を指す「最も古い用法：行為としての「*récit*」」であると述べている。この三つの「*récit*」ということばの定義づけに呼応する「テキスト」の分節として、ジュネットは「*histoire*」、「*récit*」、「*narration*」の三つを採用している。

その上で「*récit*」とはシニフィアンとして言表、物語の言説つまり物語のテキスト自体を指し（「物語言説」）ナラトロジー分析の対象となるとし、また「*histoire*」とはシニフィエとして物語の内容を指す（「物語内容」）と定義づけており、「*narration*」を物語を生産する語る行為と、広義にはその行為がおかれている現実もしくは虚構の状況全体であるとそれぞれ定義づけている。このようにして、ジュネットはナラトロジーの分析対象を「*récit*」に限定することが必要であると主張する。しかしこうした限定に続く部分やさらには実際のテキスト分析では、「*temps*」、「*mode*」、「*voix*」の三つのクラスを仮定した後、「*ORDRE [temps]*」、「*DURÉE [temps]*」、「*FRÉQUENCE [temps]*」、「*MODE [mode]*」、「*VOIX [voix]*」と合計で五つの問題系を設定し、バルト的な三分法を超えたより詳細な分節化の可能性をも提示している。

またさらに、次のようにも述べて、ナラトロジーの研究対象を説明している。

L'analyse du discours narratif sera donc pour nous, essentiellement, l'étude des relations entre récit et histoire, entre récit et narration, et (en tant qu'elles s'inscrivent dans le discours du récit) entre histoire et narration.<sup>16)</sup>

このように述べていることから考えると、ジュネットにおけるナラトロジーは「*récit*」を研究対象の中心に据えるとしてはいるが、実際には「*histoire*」と「*récit*」と「*narration*」の全てが分析対象の中に組み込まれていると考えることができる。実際、批判の多かった *Discours du Récit* の後で出された *Nouveau*

*Discours du récit* でも、「récit」/「histoire」/「narration」という分節化は破棄されないまま支持され、さらに「narration{récit | histoire}」という図式化へと進化していることが分かるのである。

[...] le couple histoire/récit, quant à lui, n'a de sens qu'intégré à la triade histoire/récit/narration, dont le plus grand défaut est son ordre de présentation qui ne répond à aucune genèse réelle ou fictive. L'ordre véritable, dans un récit non-fictif (historique, par exemple), est évidemment histoire (les événements révolus) — narration (l'acte narratif de l'historien) — récit : le produit de cet acte, éventuellement ou virtuellement susceptible de lui survivre en texte écrit, en enregistrement, en mémoire humaine. [...] En fiction, [...] l'ordre véritable serait plutôt quelque chose comme narration{histoire/récit}, l'acte narratif instaurant (inventant) à la fois l'histoire et son récit, alors parfaitement indissociables.<sup>17)</sup>

ジュネットはさらにこの最初の三分法には飽きたらず、トドロフがナラトロジーの研究領域を「temps」、「aspect」、「mode」の三つに分けていることに対して修正案を提示し、「temps」、「mode」、「voix」というもう一つの三分法を提示している。それらはそれぞれ「histoire」と「discours」との時間的諸関係に関連するクラス、「物語の『再現』の諸様態（種々の形式と度合）に関連するクラス」、「語り「narration」そのもの—すなわち語りの状況ないしは審級—およびそれを支える二人の主要人物、つまり語り手とその現実的もしくは潜在的な相手が、物語言説の中に含まれている仕方に関連するクラス」を提示しているのである。こうした二つの三分法の関係についてジュネットは次のように述べている。

[...] les trois classes proposées ici, [...] ne recouvrent pas mais recourent de façon complexe les trois catégories définies plus haut, [...] : le temps et le mode jouent tous les deux au niveau des rapports entre histoire et récit, tandis que la voix désigne à la fois les rapports entre narration et récit, et entre narration et histoire. On se gardera toutefois d'hypostasier ces termes, et de convertir en substance ce qui n'est à chaque fois qu'un ordre de relations.<sup>18)</sup>

このようにジュネットの考える三分法では、二つの三分法を構成する各要素が一对一の関係を保っているのではなく、「*récit*」/「*histoire*」/「*narration*」というカテゴリーの各項目間の関係は次のように分けられているのである。すなわち、「*histoire*」と「*récit*」の関係については「*temps*」と「*mode*」を考察することによって研究できるし、「*récit*」と「*narration*」の関係については「*voix*」を考察することによって研究できるし、「*narration*」と「*histoire*」の関係についても「*voix*」によって研究できると考えているのである。このような研究領域同士の関連性についての理解によって、ジュネットはバルトの三分法を超えて新たに五つの問題系を指定するに至ったと考えることができるが、しかしその根本にあるのは「*récit*」/「*histoire*」/「*narration*」という三分法であるといえる。

## 2-c) バル：「*histoire*」、*récit*」、*texte*」（「*fabula*」、*story*」、*text*」）

バルはバルトやジュネットの後に出てきた第二世代のナラトロジストであるが、ジュネットの三分法を「古典的」といって否定することを出発点として自らの論を進めている。

Elle [=la distinction introduite par Genette] est censée rendre compte du produit littéraire entier. Il en est d'autant plus curieux que dans la série : *histoire*, *récit*, *narration*, on rencontre un niveau, le dernier, qui est hétérogène par rapport aux deux autres. La *narration* concernent le procès d'énonciation, tandis que les deux autres concernent le produit d'une activité : l'*histoire*, qui est le produit de l'invention, et le *récit*, qui est pour Genette le produit de la disposition et la *narration*. La *narration*, en tant qu'activité, devrait être mise en série avec les autres activités productrices des niveaux : *narration*, *disposition*, *invention*.<sup>19)</sup>

このようにバルはわれわれが現在考察している「*récit*」/「*histoire*」/「*narration*」というジュネットの理論的基盤の有効性自体に疑問を投げかける。その上で、自らの三分法を提示している。<sup>20)</sup> バルの独自性は、用語こそバルトやジュネットの「*récit*」、*histoire*」という用語をそのまま用いているが、自ら

の三分法の構成要素間の関係性を説明しようとする点にある。

3. Une HISTOIRE est une série d'événements logiquement reliés entre eux, et causés ou subis par des acteurs.<sup>21)</sup>

The fabula, understood as material or content that is worked into a story, has been defined as a series of events. This series is constructed according to certain rules.<sup>22)</sup>

バルは自らの三分法の構成要素に上位下位の関係性があることを強調するために、各要素を「レイヤー」と読んでいる。「histoire」のレイヤーは「出来事」、「行為者」、「時間」、「場所」といった「物語要素」で構成される。解釈行為によってのみ明らかになるテキストのレベルをさしている。このレイヤーは「récit」レイヤーと上下関係を構築しており、バルが「histoire」レイヤーで想定しているのは下位のレイヤーにおいて物語が物語となるために必要な個別の要素の一つ一つあると考えることができる。こうした個々の要素をとりまとめていくのが、次に挙げる「récit」レイヤーである。

2. Un RÉCIT est le signifié d'un texte narratif. Un récit signifie à son tour une histoire.<sup>23)</sup>

These elements [of the fabula] are organized in a certain way into a story. Their arrangement in relation to one another is such that they can produce the effect desired, [...].<sup>24)</sup>

「récit」レイヤーでは「物語要素」で構成された「物語」が他のストーリーとは異なる特徴（「アスペクト」）を持つに至っているのだが、それらの配置はまだ決定されていない。「histoire」レイヤーで個別に析出された「物語要素」はこのレイヤーにおいて「焦点化」という過程を経ることによって独自の物語へと至るべき味付けが施されることになる。この二つのレイヤーはどちらも実体としての「テキスト」あるいは書物の形式をもって存在するものではなく、前述

したようにあくまで読解行為と分析行為によって明らかになる。そうした潜在的な二つのレイヤーを現前化したものが、「texte」レイヤーである。

# 1. Un TEXTE est un ensemble fini et structuré de signes linguistiques <sup>25)</sup>

On the text layer, embodied in the sign system of language, visual images, or any other, is directly accessible. <sup>26)</sup>

「テキスト」は、少なくとも文学テキストにおいては、「語り手(«narrateur»/«narrator»)」という媒介者を経て始めて読者の目の前に現れる。「texte」レイヤーにおいては前述した二つのレイヤーを要素として、「誰が」「何を」「どのように」語るかが決定され、それによって「テキスト」としての実体が確定することになるのである。記号の連続体として「テキスト分析者」に現前するもの、実際にはこの実体としての「テキスト」であり、「histoire」や«récit」といったレイヤーは読者の読解行為を通してのみ明らかになるレイヤーであることは前述したとおりである。

このようにナラトロジーにおける「テキスト」の分節について再確認してみると、ジュネットの三分法が実は整然と整理されたものではなく、実体としての「テキスト」を部分的にしか分類していないのに対して、バルの三分法はその構成において、構成要素からそれらの意味的まとまりを経て「語り」によって「テキスト」となるという、論理的に整合性のとれたモデルになっていることがわかる。 <sup>27)</sup>

## 結論に代えて

「テキスト」を研究する際に、それをコミュニケーション行為と捉えるのであれば、「テキスト」によるコミュニケーションとはどのようなものかについての共通の理解が必要であり、それが本論で仮説を提示した暫定的コミュニケーション・モデルであった。その上で「テキスト」をどのように研究するかについて、

主にナラトロジーの研究成果を紹介しながら、三人の論者が提案する「テキスト」の三分法について比較を行った。こうした「テキスト・レベル」とでもいうべき分節化の手法は、言語学の分野でハリデーが提唱した機能文法 (Systemic functional Grammar) から派生した記号学派の分析において、基本的な分析ツールとなっているのである。この学派ではテキスト現象を構成する要素には、1) コミュニケーションにおいて受信者の注意や関心を引き出す機能としての "modal or interpersonal function", 2) コミュニケーションにおいて現実に関する情報を受信者に伝達する機能としての "representational or experiential function", 3) コミュニケーションにおいて現実に関する情報を受信者に伝達する機能としての "compositional or textual function" が提示され、テキストにはこれらの3つのレベルが混在していると仮定されているのである。<sup>28)</sup>

いずれにせよこうした言語学的な枠組みがテキスト研究の中のさまざまな論点とどのように関わっているのかについて再検討した上で、電子テキストやハイパーテキストといった新しいタイプの「テキスト」に対しても利用できるような論理的な枠組みあるいはそれらを分析する際のツールを整備していくことが必要になるだろう。

## 注

- <sup>1)</sup> ウンベルト・エーコ、『テキストの概念』、而立書房、1993年、pp.25-26 (Umberto ECO, *Concetto di testo*, T.A. Quieroz, São Paulo, 1984) .
- <sup>2)</sup> 池上嘉彦、『記号論への招待』、岩波新書 258、岩波書店、1984、p.28.
- <sup>3)</sup> *Le Petit Robert I*, Le Robert, 1991, p.1955.
- <sup>4)</sup> Ferdinand de SAUSSURE, *Cours de linguistique générale*, Éditions Payot & Rivages, 1995, p. 27.
- <sup>5)</sup> Umberto ECO, *A Theory of Semiotics*, Indiana University Press, First Midland Book Edition, 1979, p. (日本語訳については次を参照した: U・エーコ、池上嘉彦訳、『記号論 I・II』、同時代ライブラリー 270、岩波書店、1996年。)
- <sup>6)</sup> Claude E. SHANNON & Warren WEAVER, *The Mathematical Theory of Communication*, University of Illinois Press, 1963 edition, p.34. (日本語は拙訳。)

<sup>7)</sup> *Ibid.*

<sup>8)</sup> この問題についてはU・エーコが『記号論』の中でデ・マウロの「ウォーターゲート・モデル」を引用しながら説明を付している。Cf. ECO, *op.cit.*, pp.32-47.

<sup>9)</sup> 文学研究史を概観するにあたっては次を参照した：Jérôme ROGER, *La Critique littéraire*, coll.« littérature 128 », NATHAN, 2001, 128p ; Pierre BRUNEL, *La Critique littéraire*, coll. « Que sais-je? », Presse Universitaire de France, 2001, 128p ; Gérard GENGEMBRE, *Les Grands Courants de la critique littéraire*, coll. « MÉMO » 19, Seuil, 1996, 64p.

<sup>10)</sup> Roland BARTHES, « La Mort de l'Auteur », in *Œuvres Complètes*, tome III 1968-1971, Éditions du Seuil, 2002, p.45. (日本語訳については次を参照した：ロラン・バルト, 花輪光訳, 「作者の死」, 『物語の構造分析』, みすず書房, 1979年。)

<sup>11)</sup> Cf. Gerald PRINCE, *Dictionary of Narratology*, revised edition, 2003, University of Nebraska Press, pp.66-67.

<sup>12)</sup> 厳密にナラトロジーからのアプローチというわけではないが, エーコの考察を参照のこと：U・エーコ, 篠原資明訳, 「第3章 モデル読者」, 『物語における読者』, 青土社, 1993年, pp.79-103.

<sup>13)</sup> Roland BARTHES, « Introduction à l'analyse structurale des récits », in *Œuvres Complètes*, tome II 1962-1967, Éditions du Seuil, 2002, p.835.

<sup>14)</sup> *Ibid.*, p.857.

<sup>15)</sup> Gérard GENETTE, *Figures III*, Édition du Seuil, 1972, p.71. (日本語訳については次を参照した：ジェラルド・ジュネット, 花輪光・和泉涼一訳, 『物語のディスクール』, 叢書「記号学的実践」2, 水声社, 1985年。)

<sup>16)</sup> *Ibid.*, p.74.

<sup>17)</sup> Gérard GENETTE, *Nouveau Discours du récit*, Éditions du Seuil, 1983, p.11. (日本語訳については次を参照した：ジェラルド・ジュネット, 和泉涼一・神郡悦子訳, 『物語の詩学 続・物語のディスクール』, 叢書「記号学的実践」3, 書肆風の薔薇, 1985年。)

<sup>18)</sup> *Ibid.*, p.76.

<sup>19)</sup> Mieke BAL, *Narratologie (Essais sur la signification narrative dans quatre romans*



modernes), Editions Klincksieck, 1977, p.6.

- <sup>20)</sup> バルのナラトロジー論にはフランス語版と英語版があるが、本論が取り扱う三分法については、フランス語版では « histoire/récit/texte » が、そして英語版では « fabula/story/text » が用いられている。Cf. Mieke BAL, *Narratologie (Essais sur la signification narrative dans quatre romans modernes)*, Editions Klincksieck, 1977, 200p. ; Mieke BAL, *Narratology : introduction to the theory of narrative*, second edition, University of Tronto Press, 1997, 254p.

<sup>21)</sup> Mieke BAL, *Narratologie*, p.4.

<sup>22)</sup> Mieke BAL, *Narratology*, p.7.

<sup>23)</sup> Mieke BAL, *Narratologie*, p.4.

<sup>24)</sup> Mieke BAL, *Narratology*, p.7.

<sup>25)</sup> Mieke BAL, *Narratologie*, p.4.

<sup>26)</sup> Mieke BAL, *Narratology*, p.6.

- <sup>27)</sup> とはいえ、ジュネットがナラトロジーにもたらした研究成果を否定するものではない。ジュネットが展開したナラトロジーは「語り」という営みを細かく分析し、析出した個々の現象に名前を与え、それらを分類して提示したことにある。問題は分類において依拠する基準が曖昧であるため、全体としての分類に齟齬が生じている場合があるということである。バルや他のナラトロジストはこうした全体的な整合性について異議を唱えているのであり、ジュネットが行った個別な分析は高く評価されていることに間違いはない。

- <sup>28)</sup> Cf. Michael O'Toole, *The Language of Displayed Art*, Leicester University Press, London, 1994, 295p. ただしハリデー自身はこうした分節化について、機能性という観点から言語を分析する文法においては、ことばが生み出す意味もまたあるメタ・レベルでの機能を担っていると述べ、その機能として「観念構成的 ideational つまり思索的 reflective」、「対人的 interpersonal つまり行為的 active」の二つをまず挙げ、そして最後にこれら二つのメタ機能に「テキストとしての関連性 relevance を吹き込む」もう一つのメタ機能としての「テキスト形成的 textuel」機能が存在すると述べている (cf. M. A. K. HALLIDAY, revised by Christian M.I.M Matthiessen, *An Introduction to Functional Grammar*, Edward Arnold, London, third edition, 2004, pp.29-30 [日本語訳については拙訳だ

が、次の第二版訳も参照した：M. A. K. ハリデー，山口登・笈壽雄訳，『機能文法概説－ハリデー理論への誘い－』，くろしお出版，1994 年]]。

# L'Articulation dans l'étude textologique

Shinya SHIGEMI

L'étendu du mot « texte » se limitait aux domaines écrits au début du siècle précédent, mais il peut signifier aujourd'hui plusieurs matières verbales et picturales, voire numériques, quand elles servent la communication. Il nous est donc nécessaire d'avoir une perspective cohérente et générale sur la nature communicative de texte et d'établir une base pratique de son analyse.

Il existe deux modèles communicatifs : linguistique et numérique. Puisque le modèle linguistique se base de la communication verbale, il semble que le modèle numérique explique mieux la communication de texte. Comme ce modèle contient, pourtant, les deux appareils intermédiaires entre le locuteur et l'interlocuteur, il nous faut le réviser d'une façon par laquelle, à l'intermédiaire de ces deux entités communicatives, le texte entretient le destinataire et le destinataire à son intérieur.

Certes, ce modèle générale mais hypothétique nous sert à analyser le texte, mais il y est aussi fondamental de définir les objets de l'analyse. L'étude narratologique nous fournit des pistes. Aussi l'examen de leurs théories sur l'articulation de texte est-il nécessaire. Les semblables perspectives trichotomes sont proposées par trois narratologues : Roland Barthes, Gérard Genette et Mieke Bal. Tous les trois considèrent le niveau de la « narration » comme ce qui est présent au lecteur. Tandis que Bal hiérarchise deux autres éléments de « narration » (« story » et « fabula ») l'un sur l'autre, la « narration » contient deux éléments à la même couche : « fonctions » et « actions » chez Barthes, « récit » et « histoire » chez Genette. Ainsi que Bal nous présente une perspective plus structurale et cohérente que celles d'autres.

Quant à la triade narrative, M. A. K. Halliday au domaine de la linguistique discerne trois méta-fonctions fondamentales dans le texte : « interpersonal function », « representational function » et « textual function ». Aussi constate-t-on que des recherches à d'autres domaines doivent être intégrées pour d'une base pratique textuelle, afin d'étudier le « texte » d'aujourd'hui.